

「ひねくれマーメイド」

登場人物

鳴神朝陽 (23) O L

城崎彩乃 (24) O L

後藤輝 (25) 朝陽の先輩・暁の親友

鳴神暁 (25) 朝陽の兄

茅野詩織 (23) O L・朝陽の親友

鳴神陽子 (45) 朝陽の母

部長

三井医師 (35)

看護師

社員 1

社員 2

○教会（夢の中）

教会の鐘が鳴り響く。

風が吹き花畑の花弁が舞う。

純白のドレスを着た鳴神朝陽（23）が

花畑の中を走っていく。

花畑の向こう、後藤輝（25）が背中を

向けて立っている。

朝陽「輝…！」

後藤が振り向く。

後藤「朝陽。待ってたよ」

向かい合う二人。

朝陽「輝。私、ずっと、ずっと貴方のこと」

大きいアラーム音が鳴り響く。

○朝陽の家・朝陽の部屋（朝）

目覚まし時計から大きいアラーム音が

鳴り響く中、ベッドでよだれをたらし

ながら寝ている朝陽。

ドアが乱暴に開き鳴神暁（25）が入っ

てくる。

鳴神「おいこらいつまで寝てんだ！」

鳴神、朝陽の布団をはがす。

朝陽、ぼんやりと起き上がる。

鳴神「おい、起きたか？」

鳴神、朝陽の顔を覗き込む。

朝陽、カッと目を見開く。

朝陽「せつかくいいとこだったのに！」

朝陽、思い切り鳴神の頬をひっぱたく。

鳴神、吹っ飛ぶ。

鳴神「いつてえ！」

朝陽、大きな足音を立てて部屋を出ていく。

鳴神、頬を押さえながら起き上がる。

鳴神「起こしに来てやったお兄様への態度かそれが！」

鳴神の前で扉が乱暴に閉まる。
勢いで壁にかけていたフォトフレーム
が落ちる。

朝陽と後藤、鳴神で撮った写真。

○同・洗面所（朝）

顔を洗っている朝陽。

鳴神陽子(杏)が大きなタッパーを手に

顔を出す。

陽子「朝陽ちゃん、これ輝くんに渡してほし

いんだけど」

朝陽「なに？」

陽子「輝くんのお母さんに。たくさん作っ

やったからお裾分け」

タッパーの中身は可愛くデコられたち

ぎりパン。

陽子「本当に簡単にできたのよ。あ、朝ごは

んもコレね」

朝陽「これ会社で輝に渡せてこと？」

陽子「できるでしょ？同じ職場なんだから」

朝陽「いやでもこんなの会社で渡したら周り

になんて言われるか…」

陽子「何にもやましいこと無いじゃない。頼

んだわよ」

陽子、タッパーを押し付けると戻って

いく。

朝陽、タッパーを見つめてため息。

○同・家の前（朝）

スーツ姿の朝陽と鳴神が出てくる。

朝陽の手にはタッパーの入った袋。

朝陽・鳴神「いってきます」

並んで歩き始める朝陽と鳴神。

鳴神「それ、お前が作ったことにしたら？」

朝陽「はあ？」

鳴神「女の子らしいお前の一面に輝の奴が惚れ直すかもしれないぞ」

朝陽「ばっ…バカなこと言わないでよ！」

朝陽、鞆を振り回す。

鳴神、ひらりと躲す。

鳴神「アブねえなー。そんなんだから輝に相手にされねえんだぞ」

朝陽「別に！相手にしてほしいとか思っ
てないし」

鳴神「おーおー、心にもないことを」

朝陽、鳴神を睨む。

○北星商事・全景

○同・営業部会議室

社員が集まって会議している。

後藤が発表している。

パワーポイントを操作する朝陽。

朝陽、サツと後藤に近づき資料を渡す。

重役たちは興味深げに話を聞いている。

○同・営業部会議室前

室内から盛大な拍手が起こる。

司会の声「本日は以上です。皆さまお疲れさ

までした」

社員たちがぞろぞろと出てくる。

朝陽が茅野詩織(23)と並んで出てくる。

朝陽「あー疲れた」

詩織「お疲れく良かったんじゃない？部長た

ち聞き入ってたもん」

朝陽「ありがとう」

後藤が部長と出てくる。

後藤「鳴神！」

朝陽と詩織、振り向く。

部長が朝陽に笑顔で近づく。

部長「鳴神くん、今日のプレゼンの資料は実

によかったよ。おかげで後藤くんの説明が

よく理解できた」

朝陽「ありがとうございます！」

部長、機嫌よく帰っていく。

詩織「良かったね、朝陽！」

朝陽「うん！」

後藤「鳴神、今回はありがとうな。次もよ

しくな」

朝陽「は、はい」

後藤、笑って去っていく。

詩織、笑顔で朝陽を小さく小突く。

○同・食堂

社員たちが昼食を取っている。

朝陽と詩織が昼食を食べている。

タッパーを持った後藤がやってくる。

後藤「これありがたいな。美味かった」

後藤が見せたタッパーは空。

朝陽「え、もしかして全部食べたの」

後藤「え、ダメだった？」

朝陽「それおばさんに渡してって頼まれてたやつだったの！」

後藤「そうだったのか？俺てっきり朝陽がわざわざ作ってくれたのかと」

朝陽「なんでそう思うわけ！違うよ！」

後藤「え、俺めっちゃうれしかったのに」

詩織「じゃあ次は朝陽が作りますよ。思いを込めて」

後藤「本当？朝陽、ありがとう」

朝陽「作るなんて一言も言ってない！」

後藤「だめか？」

朝陽「だって、周りに誤解されるし…」

詩織「別に誤解でもなんでもないでしょ」

朝陽「誤解です！私と輝はなんつにもない

の！ただの幼馴染、勘違いしないで！」

後藤、唇を尖らせる。

後藤「そんなに強調しなくてもいいだろ」

朝陽「あ」

チャイムが鳴る。

後藤「昼休み終わりだ。先に戻るな」

朝陽を見ないで立ち去る後藤。

茫然と見送る朝陽。

詩織「あーあ、傷つけた」

朝陽「詩織い」

詩織「ホントに素直じゃないねえ君は。そん

なんじゃ取られちゃうよ？」

詩織、朝陽をなだめる。

○児童公園入口（夜）

公園入口で座り込む城崎彩乃(24)

パンプスの折れたヒールが転がっている。
る。

ハンドバッグの中身が散らばっている。
膝はすりむいて血が滲んでいる。

涙目で膝を押さえる彩乃。

仕事帰りの後藤が通りがかり彩乃に気付く。

後藤 「あの…お困りですか」

彩乃、泣き顔で振り返る。

○児童公園内（夜）

後藤、彩乃に絆創膏を数枚渡して隣に座る。

後藤 「靴、貸して」

彩乃、折れた靴を差し出す。

後藤 「あ、修理してもいい？」

彩乃 「あ、はい。お願いします」

後藤、真剣な表情で靴から接着剤を取り出してヒールをくつつける。

ヒールのぐらつきを確認し彩乃に渡す。

彩乃、受け取った靴を履いてみる。

後藤 「どう？」

彩乃 「大丈夫みたいです」

後藤 「良かった。落ち着いたらちゃんとした

店に修理に出すといいよ」

彩乃「ありがとうございます！」

後藤「いやいや」

彩乃「あの…ご迷惑ついでに、お願いが」

後藤「うん？」

○児童公園前バス停（夜）

後藤と彩乃が並んでいる。

彩乃「すぐ近くにバス停があったなんて気付

きませんでした。あの、本当にありがとう

ございました。大変助かりました」

後藤「大したことじゃないから」

彩乃「何かお礼を」

後藤「いいって、気にしないで」

彩乃「でも」

後藤「それじゃあ今後困ってる人を見かけた

ら君が助けてあげて。これでおあいこね」

彩乃「そうですか…？」

後藤「恩は天下の周りを者ってね」

バスが走ってくる。

後藤 「ほら、バス来たよ」

後藤、彩乃に乗るよう促す。

彩乃 「本当に、ありがとうございます」

後藤、笑顔で手を振る。

後藤 「気を付けてね」

バスが走り出す。

○バス車内（夜）

席に座る彩乃。

余った絆創膏を軽く握り締め、微笑む。

○北星商事・全景

○同・営業部

部長の席に後藤と朝陽が立っている。

後藤 「こんな時期に新人ですか」

部長 「ニューヨークの新規事業部に営業で入る予定の子でね。こちらで研修してから行くらしい。ゆくゆくは研修だけじゃなくてこちらの人員も向こうに送ることになるだ

ろうな」

後藤「その新人の指導も僕が？」

部長「君ならいい指導が出来そうだからな」

後藤「恐縮です」

後藤「会議室にいるから迎えに行ってくれ」

後藤「はい」

朝陽「部長、私もですか」

部長「君もまだ指導期間終わってないだろう。」

先輩として一緒に学びなさい」

朝陽「はい」

朝陽と後藤、営業部を出ていく。

○同・会議室前

朝陽と後藤が歩いてくる。

会議室の前で足を止める朝陽と後藤。

後藤、深呼吸してからノックする。

後藤「失礼します。後藤です」

彩乃の声「あ、はいどうぞ」

ドアを開ける後藤。

○同・会議室

彩乃が立って待っている。

入ってくる後藤と朝陽。

後藤と彩乃、お互いを見て驚く。

後藤・彩乃「あっ」

朝陽、驚いて後藤と彩乃を見る。

彩乃、感極まって涙目になっている。

彩乃「会いたかった…！」

彩乃、後藤に抱き着く。

○同・会議室前

書類の山を運んでいる詩織が通る。

朝陽・後藤「ええ〜っ！」

詩織、驚いて書類の山を落とす。

詩織「え、何？」

○同・会議室

朝陽と後藤、向かいに彩乃が座る。

朝陽「どういふことですか後藤さん」

彩乃「運命の出会いをしたんです、私たち」

朝陽「貴方に聞いてないです！」

後藤「昨日帰り道で困ってる彼女：ええと」

彩乃「城崎彩乃と申します。彩乃と呼んでく

ださい」

後藤「城崎さんが困ってたのを助けたんだ」

彩乃「バスを乗り過ごし道に迷いナンパに遭

い挙句の果てにヒールまで折れてしまった

私を、不幸の縁から救い出してくださった

んです。その姿はそう！まさに王子様」

朝陽「王子様ねえ」

朝陽、白い目で後藤を見る。

彩乃「昨日はお名前も聞きそびれてしまいま

う会えないのではと思っていました。それ

がこうして再び出会えるなんて。まるで少

女漫画みたいです」

朝陽「少女漫画のヒーロー気取るにはちよっ

とおっさん過ぎると思うけどね」

彩乃「さつきからあなたはなんですか？」

朝陽「鳴神朝陽。あなたの先輩です」

後藤「俺は元々彼女の教育係だったんだけど、

これから君の教育係も兼ねるわけ」

彩乃「二人きりの研修じゃないんですか」

後藤「うん。仲良くやっついていこうな」

彩乃「はあ…」

彩乃、嫌そうに朝陽を見る。

朝陽、不機嫌に目を逸らす。

○同・食堂

朝陽、不機嫌な表情で食事している。

向かいの詩織、朝陽を見て苦笑い。

詩織「荒れてるねえ」

朝陽「ちよつとね」

詩織「新人さん入ったんだって？何かニュー

ヨーク支部に配属予定の子だとか」

朝陽「そう」

彩乃の声「後藤さんっ」

朝陽と詩織、声がした方を振り返る。

後藤が同僚と食堂に入ってきたところ。

彩乃、笑顔で後藤に走り寄る。

彩乃「お昼ご一緒してよろしいでしょうか」

後藤「いやいいよ。俺は同期と食べるから」

彩乃「私は後藤さんとお昼を一緒にしたいのです。お傍にいたいんです」

同僚たちから冷やかす声上がる。

その様子をしかめっ面で見ている朝陽。

詩織「なるほどライバル登場ってどこか」

朝陽「別にライバルじゃ…。でもあの子、初

対面からグイグイ来すぎ、ここ会社よ？」

詩織「まあちよっとビックリだけどさ。男と

しては悪い気しないんじゃない？」

朝陽、詩織に言われて後藤を見る。

同僚と騒いでいる後藤。

詩織「いつもより締まりのない顔してる」

朝陽「うう…」

彩乃が朝陽に気付いて向かってくる。

詩織「あ、こっち来た」

身構える朝陽。

彩乃「ご一緒にしてよろしいですか？」

朝陽「え」

詩織「あ、どうぞどうぞ」

彩乃「ありがとうございます。一人で食べるのは淋しくて」

彩乃、朝陽の隣に座る。

朝陽「後藤さんに断られたんでしょ」

彩乃「はい。男性だけで食べたいからと」

朝陽「あのさ、ここは恋愛する場所じゃなくて会社だよ？しかもあなたは今日初出勤なわけでしょ。いきなりそんなグイグイいくのってどうかと思うな」

彩乃、目を丸くする。

彩乃「やきもちですか？」

朝陽「えっ」

彩乃「私が後藤さんと仲良くしようとするのが気に入らないんでしょう？」

朝陽「ち、違います！私はそんな」

彩乃「え？でも鳴神さんのお顔に書いてありますよ？」

朝陽、両頬を押さえる。

彩乃「好きならそうおっしゃればいいのに。鳴神さんと私、お仕事でもライバル、恋で

もライバルって、とてもいい関係になれそうじゃありません？」

朝陽「ち、違うってば！」

朝陽の大声に周囲が振り返る。

後藤も驚いて朝陽を見ている。

朝陽、いたたまれず食堂を出ていく。

彩乃「どうして怒ってしまったんでしょう」

彩乃、平然と食べている。

詩織「あなた、結構すごいよね」

後藤、心配そうに朝陽が去った方を見ている。

○同・営業部

チャイムが鳴る。

ホワイトボードに外出予定を記入している朝陽。

後藤が入ってくる。

後藤「朝：鳴神」

朝陽「外出します。先程四葉印刷さんから連絡があったので」

後藤「あ、それなら俺も」

朝陽「書類を受け取るだけだから私だけで大丈夫ですよ。後藤さんは城崎さん見てあげてください」

朝陽、出ていこうとする。

後藤「朝陽、何か怒ってるか？」

立ち止まった朝陽、笑顔で

朝陽「何も？それじゃいつてきます」

朝陽、出ていく。

後藤、見送る。

後藤「怒ってんじゃないかねえかよ…」

○オフィスビル街

○同・四葉ビル前

四葉印刷の看板が出ているビルから茶封筒を持った朝陽が出てくる。

スマホを取り出し時間を確認する。

午後2時過ぎ。

朝陽「まだこんな時間：戻りたくないなあ」

朝陽、歩き出す。

○同・道

朝陽が歩いていると植込みから鳴き声が聞こえる。

植込みの陰に猫がいる。

朝陽「わぁ、可愛い」

猫、ニャアと鳴いて走っていく。

追いかける朝陽。

○同・横断歩道

信号が赤になっている。

トラックが走ってきている。

猫、道路に飛び出す。

朝陽「あっ！」

朝陽、後を追う道路に飛び出す。

トラックの運転手、朝陽に気付いて慌ててブレーキを踏む。

猫を抱き上げた朝陽、目の前にトラックが迫っているのを見て目を見開く。

トラックのブレーキ音が響く。

○教会（夢の中）

純白のドレスを着た朝陽が花畑の中を
走っていく。

花畑の向こう、後藤が背中を向けて立
っている。

朝陽「輝…！」

後藤の隣には、純白のドレスを着た彩
乃がいる。

朝陽、驚いて立ち止まる。

彩乃「後藤さんは私と結婚しますの」

後藤「いつも憎まれ口ばかり叩くお前より、
素直に気持ちをぶつけてくれる彩乃の方が

可愛いよ。俺は彼女と結婚する」

朝陽「そんな、待って輝、私はずっと…」

後藤、彩乃の肩を抱いて去っていく。

朝陽、慌てて後を追うがどんどん離れ
ていく。

朝陽「いや。輝、待って輝！輝！」

朝陽、精いっぱい手を伸ばす。

○病室

頭に包帯を巻いた朝陽、ベッドの上でハッと目を覚ます。

鳴神の声「やっと起きたか」

朝陽、ポカンとして辺りを見回す。

陽子が涙を浮かべて微笑んでいる。

陽子「良かった、朝陽ちゃん！先生呼んでくるわね」

反対のベッドサイドに後藤がいる。

後藤「朝陽：大丈夫か？」

起き上がるようにするが頭に痛みを感じてうずくまる。

鳴神「バカ、無理に動くな。お前頭打って丸一日寝てたんだから」

朝陽、不思議そうに鳴神を見る。

鳴神「お前、トラックにぶつかって頭打って病院に運ばれたんだよ。覚えてるか？」

朝陽、首を横に振って

朝陽「（声にならない）あまり覚えてない」

朝陽の声が出ていないことに驚く一同。

鳴神「おいどうした？声出てないぞ」

朝陽、しゃべろうとするが声が出ない。

陽子が入ってくる。

陽子「朝陽ちゃん、先生呼んで来たわよ！」

× × ×

三井医師(35)が朝陽の診察をしている。

陽子「先生、どうですか」

三井「声帯に異常は見られないし、事故のシ

ョックで声が出ないのかもしれないね」

後藤「先生、それは治るんですか」

三井「まだ詳しいことは言えませんが、シヨ

ックが原因のものなら治ると思いますよ。

まずはケガを治すことに集中しましょう」

朝陽、うなづく。

陽子「ありがとうございます」

三井、病室を出ていく。

入れ違いに看護師が入ってくる。

看護師「鳴神さん、お手続きの件でお話を」

陽子「あ、わかりました。行ってくるわね」

陽子、看護師と部屋を出ていく。

朝陽、後藤の服を引っ張って呼ぶ。

後藤「なに？…あ、ちよっと待って」

後藤、鞆からメモ用紙とペンを出して

朝陽に渡す。

後藤「ここにどうぞ」

朝陽、会釈すると書き始める。

朝陽（文字）「四葉印刷さんの書類は？」

後藤「会社に持って行ってあるから大丈夫」

朝陽、ホッと息を吐く。

鳴神「輝、俺ちよっと飲み物買ってくるわ」

鳴神、朝陽にウインクして出ていく。

後藤「朝陽が目覚めてくれてよかった。暁か

ら連絡もらった時は寿命が縮んだよ」

朝陽（文字）「ごめんなさい」

後藤「なんで謝るんだよ」

朝陽（文字）「仕事。迷惑かけた」

後藤「別に迷惑だなんて思ってないよ。こっ

ちのことは全然気にしないで」

朝陽、うつむく。

後藤「城崎さんもいるからさ」

朝陽、顔を上げ後藤を睨む。

後藤「え、何。なんでそんな顔するんだよ」

朝陽（文字）「（殴り書きで）別に！」

後藤「ええ、なんで急に怒ってんの…」

朝陽、後藤に背を向けて横になる。

後藤「…わかった。今日はもう帰るな。明日

また来るから」

後藤、朝陽の肩を軽く叩くと立ち上がり部屋を出ていく。

鳴神が戻ってくる。

鳴神の声「あれ、輝は？」

朝陽、背を向けたまま答えない。

鳴神「まあいいか…また来るだろ」

朝陽、泣きそうになるのを堪えて目を閉じる。

○北星商事・全景

○同・営業部

後藤と彩乃が話している。

彩乃「目覚められたんですか。良かった。後藤さんと二人きりは嬉しいですけど、ライバルがいないと張り合いがありませんし」
考え込んで聞いていない後藤。

彩乃「後藤さん？」

後藤「えっ、ああ、ごめんなんだっけ」

彩乃「もう。それで、いつ退院の予定なんですか？」

後藤「まだ聞いてない」

彩乃「そうですか。元気に戻ってきてほしいですね」

後藤「ああ、そうだな」

彩乃、後藤を見つめる。

後藤「ミーティング終わり。外回り行くぞ」
後藤と彩乃、部屋を出ていく。

○成城病院・全景

○同・病室

入口の札に「鳴神朝陽」と書いてある。
ベッドの上で起き上がりテレビを眺め
ている朝陽。

ベッドサイドで雑誌を開いている陽子。

陽子「異常が無くて良かったわねえ、朝陽ち
ゃん。頭の方も問題は無さそうだし」

朝陽、テレビを見たまま。

陽子「声も一時的なものなんだから、きっと
すぐ治るわよ」

朝陽、目を伏せる。

ドアをノックする音。

陽子「はい、どなた？」

陽子、ドアを開ける。

陽子「あら、輝くん」

朝陽、慌ててベッドの上に正座する。

後藤「今、大丈夫ですか？朝陽」

陽子「ええ、どうぞ」

後藤「失礼します」

後藤が入ってくる。

陽子、笑顔で手を振って出ていく。

後藤、陽子を見送ってからベッドサイドに座る。

後藤 「外回りって言って来ちゃったよ」

朝陽、メモ用紙に書き込む。

朝陽（文字） 「城崎さんは？」

後藤 「ああ、お客さんの所」

○松井社長の家・応接室

松井社長が笑顔で豪快に話している。

彩乃、にこにこしながら聞いている。

○成城病院・病室

後藤、笑顔を見せる。

後藤 「松井社長わかる？あの話が超長い人」

朝陽、大きくうなづく。

後藤 「あの子ならうまいこと相手するだろ」

朝陽（文字） 「城崎さんに怒られるよ」

後藤 「ちゃんと謝るよ。朝陽のことが心配で、仕事終わるの待ってられなかったから」

後藤、朝陽の頭に手を置く。慌てて手を放す。

後藤「あ、悪いケガしてるのに」

朝陽、笑顔で首を横に振る。

後藤「頭のケガ、大丈夫なのか？脳に何かあると声出なくなったりするんだろ？」

朝陽、メモ用紙に書こうとする。

後藤「あ、いいよ後で暁にでも聞く。その様子だと深刻な状況じゃないってこと？」

朝陽、うなづく。

後藤「そっか！」

後藤のスマホが鳴る。

相手を見て顔をしかめる後藤。

後藤「あ、やばい」

後藤、席を立ち電話に出る。

後藤「もしもし？」

彩乃が出る。音漏れする程大きな声。

彩乃の声「どこにいるんですか一体！」

後藤「あー、ごめんごめん。松井社長、終わってた？」

○街中

彩乃が仁王立ちで電話している。

彩乃「無事終わりましたよ。大変だったんですから」

後藤の声「そうか。でもあの松井社長とうまくやれるってことはさすが、有能だよ」

彩乃「お世辞は結構です」

後藤の声「悪かった。お詫びに昼飯奢る」

彩乃「本当ですか？絶対ですよ」

○成城病院・病室

後藤が電話している。

朝陽、メモ帳に書き込み、裏返して手に持ったまま見ている。

後藤「わかった。じゃあそっちに戻るから。

…うん、5分くらいで着くよ。じゃあ」

電話を切る後藤、苦笑して朝陽を見る。

後藤「…そんなわけだから、今日は帰るな」

朝陽、うなづく。

後藤 「もうちよつといたかったんだけどな」

後藤、朝陽に背を向けて上着を着る。

朝陽、伏し目がち。

後藤が振り返ると慌てて顔を上げる。

後藤 「それじゃ、また来る」

朝陽、うなずくと小さく手を振る。

後藤も笑顔で手を振り背を向ける。

朝陽、出ていく後藤の背中に声をかけ

ようとして止める。

後藤が出ていきドアが閉まる。

病室に朝陽一人になる。

朝陽、メモ帳を開く。

大きく「好き」と書いてある。

○朝陽の家・全景

○同・鳴神の部屋（夕）

鳴神が部屋で漫画を読みながら電話し

ている。

後藤の声「失声症？」

鳴神「そう。事故のショックとかで一時的な
もんだろうけどって」

後藤の声「じゃあ体に異常はなかったんだ」

鳴神「念の為しばらく入院するらしいけど」

後藤の声「そっか：良かった。治るんなら

それで安心だ」

鳴神「：そうだな」

鳴神、漫画を閉じる。

○北星商事・営業部（夜）

暗いオフィスで後藤が電話している。

鳴神の声「復帰したら仕事の方フォローして

やってくれよ」

後藤「もちろんそのつもり」

彩乃が入口の陰から後藤の様子を見つ

めている。

後藤「毎日見舞いに行ってもいいかな？」

鳴神の声「いいんじゃないやねえの？ウザイって言

われるかもしれねえけど、あいつの場合百

パー照れ隠しだから」

後藤 「はは、だといいな」

思いつめたような表情の彩乃、その場を去っていく。

○朝陽の家・鳴神の部屋（夜）

鳴神、電話をしながら立ち上がる。

鳴神 「ああ、じゃあな」

鳴神、電話を切りカーテンを開ける。

鳴神 「ただでさえ素直じゃないくせにな。声まで素直じゃなくなるとかバカかあいつ」

鳴神、窓の外を見つめる。

○成城病院・病室

ベッドの上、メモ帳を見ている朝陽。

「好き」と書いたページを見ている。

ペンを取り何度も「好き」と書く。

スマホの輝と鳴神と三人の画像を見る。

ノックの音がする。

朝陽、慌ててメモ帳を破りゴミ箱に捨てる。

後藤「よお」

彩乃「こんにちは」

後藤と彩乃が入ってくる。

朝陽、彩乃を見て目を丸くする。

彩乃「私がお見舞いに来たら変ですか？」

朝陽、首を横に振る。

後藤「今度は自分も連れて行って言うからさ。

これも外回りの一環だ」

彩乃「そういうことです」

後藤、ベッドサイドの椅子に座る。

彩乃、その隣に立つ。

彩乃「具合はいかがですか？」

朝陽、メモ帳に書き込む。

朝陽（文字）「もうほとんど元気」

彩乃「声、本当に出ないんですね」

朝陽、うなづく。

彩乃「それじゃあ出勤してもあまりお仕事で

きませんね」

朝陽、ムツとする。

後藤「何言ってるんだ」

彩乃「鳴神さんより私の方が役立ちますよ？
そうだ、私がニューヨークに異動する時一
緒に行きませんか？向こうもきつと歓迎して
くれます」

後藤「俺英語苦手だからなあ」

後藤のスマホが鳴る。

後藤、電話を受けて病室を出ていく。

彩乃、ゴミ箱を見る。メモ用紙のゴミ
に好きと書いてあるのが見える。

彩乃「（小声で）ふうん」

彩乃、朝陽を見て微笑む。

彩乃「早く治して戻ってきてくださいね？」

朝陽（文字）「来てほしくないかと思った」

彩乃「そんな意地悪なこと考えませんよ。恋
も仕事も、ライバルがいたほうが張り合い
あるじゃないですか」

朝陽（文字）「恋のライバルじゃないよ」

彩乃「まだそんなこと言ってるんですか？」

彩乃、大げさに肩をすくめ首を横に振
る。

彩乃「もしかしたら神様からの試練なのかも
しれませんね、素直じゃない鳴神さんへの。
どうせ素直にならないなら声なんてなくて
もいいでしょって」

朝陽、彩乃を睨む。

後藤が戻ってくる。

二人の雰囲気戸惑う。

○同・病室（夕）

窓の外が赤くなってきている。

朝陽、スマホの画像を見ている。

今日三人で撮った画像。

スマホのメモを開き打ち込む。

朝陽（文字）「輝」

朝陽、「す」と打ち始めて消す。

スマホを消して目を閉じる。

○北星商事・全景

○同・営業部

部長の席に後藤が立っている。

後藤、堅い表情で礼をすると彩乃の席に行く。

後藤「城崎、ちょっと」

彩乃を連れて出ていく。

○同・食堂

彩乃、コーヒーを二杯トレイに載せて運んでくる。

彩乃「どうぞ。ブラックでしたよね」

後藤「ああ：ありがとう」

彩乃、向かいに座ってコーヒーを啜る。

彩乃「何かお話でしたっけ」

後藤「そうだ。ニューヨーク支部の話。君が俺を推薦したって」

彩乃「はい。いいお話でしょう？向こうで実績を積んで戻ってくれば出世街道にも乗れるんじゃないですか？」

後藤「昨日のは冗談じゃなかったのか」

彩乃「後藤さん、海外勤務憧れるって言って

たでしょう？」

後藤 「言ったけどさ……。先方はベテランを望んでるんだろ？俺はベテランじゃないし、海外でできるようなレベルじゃ」

彩乃 「私が一緒にいたいからです」

後藤 「は？」

後藤、顔を上げる。

彩乃、ジッと後藤を見つめる。

彩乃 「ニューヨーク支部に転勤になっても、私が後藤さんと一緒に行きたいからです」

後藤 「なんで」

彩乃 「好きなんです。後藤さんのこと」

彩乃、ジッと後藤を見つめる。

後藤、目を泳がせコーヒーを飲む。

後藤 「何で俺なんだよ」

彩乃 「後藤さんだからですよ」

後藤、目を逸らす。

彩乃、コーヒーを飲み干し立ち上がる。

彩乃 「もし受け入れてもらえるなら、一緒にニューヨーク行ってくださいね」

彩乃、立ち去っていく。

後藤、彩乃を見送り、頭を乱暴に搔く。

○成城病院・全景（夕）

○同・病室（夕）

朝陽、鳴神が携帯ゲームで対戦している。

鳴神「ちよ、お前それはナシだろ！あ、あ、

あゝっ！」

朝陽、大きく拳を掲げる。

鳴神「あー…おい朝陽、もう一回」

朝陽、ニヤリと笑ってメモ帳に書き込んで見せる。

鳴神「よおし賭けようじゃねえか。退院祝いに奢らせてやるよ」

朝陽と鳴神、プレイを始める。

ノックの音が響く。

顔を上げる朝陽。

鳴神「よっしヤスキあり！」

後藤が入ってくる。

後藤「よお」

鳴神「よっしゃ勝利い！」

鳴神、立ち上がってガッツポーズ。

朝陽、ゲーム機を握り締めて項垂れる。

後藤「何やってんの、お前ら？」

鳴神「あ、輝か。どした？もうそろそろ面会

時間終わりじゃなかったっけ」

後藤「そうなんだけど、今日は昼間に来れな

かったからさ。朝陽の顔見たくて」

朝陽、半泣きの顔で後藤を見る。

鳴神「残念だったな朝陽い。勝負は勝負だか

んな、退院したら奢れよ」

後藤「楽しそうだな。朝陽も。やっぱり兄妹

だと言葉無くても伝わるのかね」

鳴神「別に伝わってねえよ」

後藤「そうか？」

鳴神「やっぱ言いたいことはちゃんと口に出

してなんぼだろ。なー朝陽？」

朝陽、鳴神を睨む。

鳴神「あ、こいつの退院決まったぜ」

後藤「そうか、良かったな！いつ？」

鳴神「明後日」

後藤「ちよっと早まったな。経過がいい証拠か。おめでとう、朝陽」

朝陽、笑顔でメモ帳に書き込む。

朝陽（文字）「仕事にもすぐ復帰する予定。」

迷惑かけるけどよろしく」

後藤「ああ。なんでも言ってこい」

朝陽、うなづく。

鳴神「退院祝いは三人で叙々苑な。奢りよろ

しくな、朝陽ちゃん？」

後藤「お前らキツイ賭けやってたんだな」

鳴神「お前のおかげで俺の勝利よ」

後藤「（朝陽に）ごめんな、半分出すよ」

朝陽、後藤に深々と頭を下げる。

笑いあう三人。

○朝陽の家・全景（朝）

鳴神の声「おら朝陽起きろー！」

○同・洗面所（朝）

スーツ姿の朝陽が顔を洗っている。

鏡をジッと見つめ、鏡に向かって声を

出そうとするが出ない。

朝陽、不満そうに息を吐く。

○同・家の前（朝）

スーツ姿の朝陽と鳴神が出てくる。

鳴神「いつてきます」

陽子の声「いつてらっしゃーい！」

並んで歩き出す朝陽と鳴神。

鳴神「もしきつかったら連絡して来いよ。あ、

輝に送ってもらって帰ってきてもいいけど

な。その方が嬉しいか」

朝陽、鳴神の腹を殴る。

鳴神「ぐっ…やっぱりゴリラ女…」

朝陽、鳴神を置いて先へ歩いていく。

○北星商事・全景（朝）

○同・営業部（朝）

社員たちが入社してきている。

後藤、自席でパソコン作業をしている。

彩乃が出社してくる。

彩乃「おはようございます」

後藤「あ、おはよう」

彩乃「あの、後藤さん。この間の…」

社員たちがざわつく。

後藤と彩乃、入口の方を見る。

朝陽が出社してきている。

社員1「鳴神じゃん！ケガはもういいのか」

社員2「声出ないんだって？大丈夫？」

社員たちに笑顔で対応している朝陽。

後藤、笑顔になり朝陽の元へ行く。

彩乃、不満そう。

後藤「朝：鳴神、おはよう」

朝陽、後藤を見て深々と頭を下げる。

後藤「無理はするなよ？」

朝陽、敬礼して見せる。

○同・資料室前

入口の札に「資料室」とある。

後藤と朝陽が入っていく。

○同・資料室

後藤と朝陽が入ってくる。

後藤「今度のプレゼン資料、リストアップしてあるからコピーよろしく」

後藤、プリントを朝陽に渡す。

後藤「会議室で作業してるから、できたら持ってきてくれ」

朝陽、敬礼する。

後藤、敬礼を返し資料室を出ていく。

朝陽、書棚へ向かう。

× × ×

コピー機から紙が出てくる。

隣の机には出来上がった資料のコピーの束が大量。

朝陽、束をまとめて抱えると資料室を

出ていく。

○同・会議室前

紙の束を抱えた朝陽がやってくる。

ノックしようとする。

彩乃の声「そろそろお返事いただけません

か」

朝陽、そっとドアに耳を当てる。

○同・会議室

後藤の隣に彩乃が立っている。

彩乃「来週にはニューヨークに行くんですよ。

早くお返事をいただかないと」

後藤「別に付き合っても一緒に仕事は

できるだろ」

彩乃「嫌です。慣れない海外での仕事です

よ？恋人と一緒にじゃなきゃ頑張れません」

彩乃、ふんぞり返る。

○同・会議室前

朝陽、眉を顰める。

○同・会議室

後藤、苦笑。

後藤「ハッキリ言うね、気持ちいいくらい」

彩乃「言わないと伝わりませんから。もし後

藤さんが私の想いを拒むのでしたら、他の

方とニューヨークへ行きます」

後藤「文字通り公私混同だな」

彩乃「鳴神さんも無事に復帰しましたし、も

う心配事はないでしょう？向こうで私と新

生活を始めましょう」

後藤、目が泳ぐ。

○同・会議室前

朝陽、ドアに背を預け立っている。

無表情でゆっくりその場を離れる。

○教会（夢の中）

タキシードを来た後藤が微笑んでいる。

後藤の隣には彩乃が微笑んでいる。

○同・営業部

社員が集まっている。

部長と後藤、彩乃が前に立っている。

朝陽は他の社員と同じ側に立っている。

部長「えー、ニューヨークに新規に事業部を立ち上げる話は皆も知ってると思う。城崎くんはそちらで営業職を務めるために入社してもらったわけだが、この度後藤くんにも向こうで頑張ってもらうことになった」

社員たちが驚きでざわつく。

部長「明日から向こうでの準備も始まるそう
だ。皆、応援してやってくれよ」

社員たちから拍手が起こる。

後藤、笑顔で手を振る。

朝陽、うつむき気味に立っている。

彩乃、朝陽の様子に気付く。

○同・廊下

歩いている朝陽に後藤が駆け寄る。

後藤「朝陽！」

後藤「何か顔色悪いな。大丈夫か？」

朝陽、笑顔を作っとうなずく。

メモ帳を取り出し書き込む。

朝陽（文字）「栄転おめでとう」

後藤「あはは、栄転なのかな？ありがとう」

朝陽、ニコニコとうなずく。

後藤「気がかりはお前の教育係なんだけど」

朝陽、首を横に振る。

朝陽（文字）「もう十分」

後藤「そうか？でも俺としては…」

朝陽、笑顔で頭を下げると去っていく。

後藤「あ、朝陽？」

振り向かず去っていく朝陽。

後藤、首を傾げる。

○朝陽の家・全景（夜）

鳴神の声「おい朝陽！」

○同・朝陽の部屋（夜）

ベッドに寝転がり雑誌を見ている朝陽。
スマホを持った鳴神が真剣な表情で入
ってくる。

鳴神「輝、明日からニューヨーク行っちゃって。

お前いいのかよ。せつかく同じ会社に入っ

たつてのに…」

朝陽、鳴神を強引に部屋から押し出す。

鳴神「おい、朝陽！」

○同・朝陽の部屋の前（夜）

鳴神の目の前でドアが閉まる。

鳴神「おい！…ああもう」

鳴神、イライラと後藤にLINEする。

鳴神（LINE）「朝陽は何か言ってたか」

後藤（LINE）「栄転おめでとうって」

鳴神（LINE）「それだけ？」

後藤（スタンプ）「？」

鳴神、壁を叩く。

鳴神「つたく、バカ朝陽！知らねえぞ」

鳴神、足音を立てて去っていく。

○同・朝陽の部屋（夜）

朝陽、泣きそうな顔で突っ伏す。

○羽田空港・全景

○同・ロビー

大きいキャリーバッグを持った後藤がやってくる。

航空券を見る。二時発ジョン・F・ケネディ国際空港行き。

○朝陽の家・全景

○同・朝陽の部屋

朝陽がベッドの上で布団に丸まっ
ている。表情は見えない。

○同・朝陽の部屋の前

鳴神がノックする。

鳴神「朝陽。起きてるんだろ。いいのか空港
行かなくて。おい！」

鳴神、ノブを捻る。鍵がかかっている。

鳴神「くそ、強引に破ってやろうか」

彩乃の声「お願いしてもいいですか」

鳴神、驚いて振り返る。

○同・朝陽の部屋

激しい音がしてドアが開かれる。

驚いて起き上がる朝陽。

彩乃が仁王立ちしている。

朝陽、驚いて硬直する。

鳴神と陽子、陰から様子を見ている。

彩乃「まだそんなカッコしてるんですか。休

みの日は一日ジャージ派ですか？」

朝陽、口をパクパクとするだけ。

彩乃「来ないんですか。空港」

彩乃、朝陽に人差し指を突き出す。

彩乃「私、勝ち逃げはしたくないんです」

朝陽、目を見開いて彩乃を見る。

彩乃「あなたの気持ち、後藤さんは知らない
ままですよ。それでいいんですか本当に」

朝陽、唇を噛む。

彩乃、溜息。

彩乃「私の恩返しはここまです。その気が
あるなら追いかけてきてくださいね」

彩乃、去っていく。

朝陽、拳を握り締める。

○羽田空港・全景

○同・ロビー

後藤、彩乃に気付いて手を挙げる。

彩乃がキャリアバッグを手に笑顔で手
を振る。

○街中

鳴神の運転する車が高速で走っていく。

○車内

真剣な表情で運転する鳴神。

助手席でグリップを握っている朝陽。

スマホを見る。

彩乃（LINE）「二時発の便で行きます」

時計を見る。「0時20分。」

朝陽、目を閉じる。

○羽田空港・出発ロビー

後藤と彩乃、並んで座っている。

ノンビリとスマホを見ている後藤。

彩乃、チラチラと周囲を見ている。

後藤「何か探してるの？」

彩乃「あ、いえ……」

彩乃、笑顔を見せつつ周囲を見る。

時計を見てまた周囲を見る。

○同・入口

鳴神の車が急ブレーキで停車する。

助手席から朝陽が出てくる。

鳴神「お前は行け！」

鳴神の車は走り去っていく。

朝陽、走って入っていく。

○同・出発ロビー

後藤、立ち上がる。

後藤「そろそろ行こうか」

彩乃「あの、後藤さん」

後藤「なに？」

彩乃「鳴神さんと、ちゃんとお別れしなくて

いいんですか？」

後藤「鳴神と？昨日、ちゃんとおめでどうっ

て言葉もらったけど」

彩乃「そういうことじゃなくて…。本当に、

私とニューヨークへ行っていいんですか」

後藤、彩乃を見つめる。

○同・ロビー

朝陽、必死の形相で走っている。

○同・出発ロビー

後藤と彩乃が向かい合っている。

後藤「君が何を言いたいのかわからないけど。

ニューヨーク行きは俺が決めたことだよ」

彩乃「一緒に行ってくれるということは私の

気持ちを受け入れてくれたんですよね。そ

う思っているんですよね」

後藤、ためらいつつうなずく。

○同・エスカレーター

朝陽、他の人に構わず上っていく。

○同・出発ロビー

彩乃「じゃあ言ってくれますか。私のことが

好きだって。鳴神さんよりも」

後藤「なんでそこで朝陽が出てくるんだ」

彩乃「いいから」

後藤、頭を掻く。

○同・レストラン街

朝陽が全速力で走っている。

○同・出発ロビー

向かい合う後藤と彩乃。

後藤、ためらいながら口を開く。

後藤「俺は…」

顔を上げた後藤、遠くを見て驚く。

後藤「あ」

彩乃、振り返る。

汗だくで荒い息の朝陽が立っている。

後藤「朝陽…」

彩乃「（小声で）遅いですよ…」

息を必死で整える朝陽。

後藤「なんでここにいるんだ？朝陽」

朝陽、必死で声を出そうとする。

しゃべろうと必死の朝陽。

後藤と彩乃、朝陽を見つめる。

後藤、真剣な表情。拳に力が入る。

朝陽、泣きそうになりながらしゃべろうとする。

彩乃、ジッと見ている。

彩乃「（声に出さず）頑張れ」

朝陽「す、好き」

後藤と彩乃、目を見開く。

朝陽「私、輝のこと、好き！」

後藤「朝陽……」

朝陽「輝が好き！行かないで、輝！」

朝陽の目から涙がこぼれる。

後藤、朝陽に駆け寄る。

朝陽、後藤に抱き着く。

朝陽「輝、輝」

後藤、朝陽の頭を撫でる。

後藤「朝陽……」

抱き合う後藤と朝陽。

彩乃、苦笑している。

彩乃「やっと出ましたね」

朝陽、彩乃を見る。

彩乃「気持ちを声に出す気分はいかがですか？」

朝陽、喉に手を当てる。

朝陽「あ」

後藤「声、戻ったな」

彩乃「どうしても伝えたいって思ったから出たんじゃないですか？」

朝陽と後藤、抱き合ったままなことに気付いて慌てて離れる。

朝陽「城崎さん、なんで…」

彩乃「勝ち逃げはしたくないと言ったでしょう？正々堂々と勝負したかったんです」

彩乃、後藤を見て

彩乃「こうでもしないと、後藤さん自身も気付かなそうだったんで」

後藤「え、俺？」

彩乃「素直じゃない鳴神さんと、自分に鈍感な後藤さん。ある意味お似合いですね」

朝陽と後藤、お互いを見る。

後藤「城崎、ごめん俺…」

彩乃「ええ。残念だけど恋人と海外転勤は無理みたいですね、私」

彩乃、微笑んで朝陽に手を差し出す。

彩乃「後藤さんはしばらく借りておきますね。

返してほしかったら、頑張ってニューヨー

クまで来てくださいね」

朝陽、笑顔でその手を握る。

朝陽「わかった」

朝陽、後藤を見る。

朝陽「頑張って追いかけるね。輝と一緒にい

たいから」

後藤「ああ。俺も迎えに行くよ」

朝陽と後藤、微笑みあう。

○同・滑走路

飛行機が飛んでいく。

○同・屋上

朝陽が飛行機を見送っている。

鳴神がやってきて朝陽の隣に立つ。

鳴神「間に合ったのか」

朝陽「うん」

鳴神「話せたのか」

朝陽「うん。告白しちゃった」

鳴神「そっか」

一瞬の間。

鳴神「え、しゃべってるし」

朝陽「今気づいたの？」

朝陽、笑う。すっきりした様子。

鳴神「全部吐き出したって感じだな」

朝陽「うん。やっぱり言葉にしなきゃ伝わら

ないね」

鳴神「そうだな」

朝陽「私、ニューヨーク行くから」

鳴神「はあ、なんだおい急に積極的だな」

朝陽「うん。後悔したくないからね」

朝陽、空を見る。

飛行機は大分小さくなっている。

朝陽「待っててね」

朝陽、微笑む。

了